

踏切り

玉木鏡子

—

前方、踏切りごしに見える街並に夕陽が落ちて行く。

昼の舞台に別れを告げるひととき。光の持ち矢を出しつくそうとでもいうのか。

放たれた矢は大気を貫き、研ぎすまされ、瞳を射抜く。

思わず逸らせた尚子の目に、軒をさし交して並ぶ家々の屋根瓦が映る。それは日暮れ時の海原のように鈍色を朱に塗り替え、てらてらと光っている。

蜜柑色の日輪が信号塔の後に隠れたとたんに辺りは色褪せ、尚子は夕刻の駅前の慌ただしさに引き戻された。

赤いドロップ色の信号が灯り、警笛が鳴り始める。

あわてて駆け出そうとしたもののすぐに諦めた尚子は、わざとのように買い物籠を揺すりながら踏切りの前まで歩いて行った。

陽のかげった冷気に、信号が音の鉦を打ち込んでいる。

頭上で弾けるその乾いた金属音に尚子の背筋が伸びる。

遮断機の先端が弧を描き、目の前でぶるんと弾んで水平に停まった。

その時、かなきり声を上げる警鐘に混じって、

「尚ちゃーん」と呼ぶ声が耳をかすめた。

遮断機の向こうで満面笑みを浮かべた老女が、曲がった腰を精一杯伸ばして手を振っている。

肉のない節くれだった指。着物の袖がめくれて痩せた腕が肘まで露わだ。

「お母さんっ」

思わず声が出た。その母が七年前に亡くなったことなど頭から吹き飛んでいる。

尚子が手を振り返そうとしたとき、ウィンという音とともに列車が視界を塞いだ。

風にむんずと胸ぐらを取られる。

数秒のち、屋根瓦の海に半身を沈めた夕陽が再び現れた。

目を眇めながら母の姿を探すが、視線はむなしくさまよう。

烈風ごと電車が幻を連れ去ったのか。

ベルがふつつり途絶え、遮断機がゆるゆると上がる。

尚子は待ち切れずにその下をくぐり抜け、線路に沿ったアスファルトの小道に出た。

やはり年寄りの姿など、どこにも見当たらない。

思い出したように小さく息を吐いて、いつものスーパーマーケットへと向かう。つかの間の出来事は余熱を持って、懐に暖かい卵を抱えているようだ。

「よくこの道を母さんと一緒に買い物に行っただけ」

この十年、駅の周辺にアパートが建ち並んだせいで人の往来も多くなったが、昔は朝夕を除いてはしんと静まりかえった田舎道だった。むろん当時は舗装などされてはおらず、時おり通る車も目一杯道を占領した後は砂埃をあげて立ち去った。

電車のダイヤも今ほどに頻繁ではなかった。赤茶けた砂利の上に二本、コバルトブルーに光る線路が田圃の横に置き捨てられたように、町の外れの木立の辺りまで伸びていた。足を広げてその上に立ち、遙か遠くでひた走る汽車に思いを馳せたものだ。

線路の脇には草が生い茂り、夏は虫の鳴き声も賑やかで、列車が通過するほんのひとときは掻き消されたものの、再び何十奏にもなって地底から沸き上がって来るのだった。

幼いころの思い出に浸りながら尚子が店のガラス戸を開けると、蛍光灯に照らされた陳列台の上で黒ずんで見える菜っ葉が目に入った。

かつてはこの店も、窓のないせいでも薄暗い小さな市場だった。いくつもぶら下がった裸電球が八百屋に乾物屋、魚屋と、それぞれに違う世界を照らし出し、野菜も果物も魚も血の通った彩りで客を手招いていた。

それぞれの店の主は自分の「陣地」を仕切っていて、こちらがその領分へ入ると威勢の良い声を掛けて来た。

木箱の底を並べた上に行儀よく置かれた売り物に目を奪われ、どれを買おうかと迷いつつ歩いていたのだろう。行き交う買い物客と肩が触れあう度に母は謝っていた。

この市場を幼い尚子は母親と一緒に毎日訪れた。一人っ子で、留守番が恐かったせいもある。

当時は果物屋が店先に張り出していて、日射しが夏を告げるころになると、市場に近づくと桃の香りが漂って来た。

今のようにな年中好きなときに買えるようになってから果物は香りを失い、色と形だけになった。

あれは尚子が六歳のころ。少し先を歩いていた母が振り返り、

「ちよつと贅沢だけど、桃、買おうか」

と、秘密めいた笑みを浮かべた。そのとき初めて桃が母の好物であることを知った。

母親に好き嫌いがあるなどは考えたこともなかった。偏食がちな子供や夫中心の献立で、誰も作り手の好みを意識したことさえない。珍しい到来ものも、夫や子供の分を取り置くと、母は自分の口に入れる前に隣近所に分けていた。

会社勤めの父の帰宅は遅いので、尚子は先に夕食をすませた。

そんなとき、母は肘をついた手の平に顎を寄せ、我が子の学校の話に頷いていた。

そして最後は食のすすまない娘の皿を溜め息まじりに取り上げ、「もつたいない」と言いながらきれいにさらえるのだった。

亡くなる前、病院食が喉を通らないと聞いて、見舞いに桃を持参したことがある。

季節外れにやつと手に入れた桃は不味かったのか、手を合わせただけで再び口にすることはなかった。あれから桃を買ったことはない。

それにしても踏切りの向こうで、母はなんと屈託のない笑みを浮かべていたことか。

家出同然で一人暮らしを始めた大学時代からこのかた、母にあのようにあっけらかんとした笑顔を向けられたことはない。

なすこと全て母親の意に背いた娘だった。それを我が儘とは露思わぬまま我を通し、我が子に優しい言葉の一つでも掛けようと口籠る母親をはね除けた。

東京で結婚したときも、

「一度こちらに顔を見せにおいで」と言う母親に、

「共働きで忙しいから」と断り、結局そのまま海外出張に出ることになった。両親が気に入る夫ではないという思い込みもあった。

その後、父は亡くなったが、母はそのときも一人で取り仕切った。当時、尚子は外国暮らしの上、妊娠しており、母は娘に大事をとって長旅をせぬよう言ってきた。そんな申し出に甘えて帰国しなかったばかりか、永年連れ添った連れ合いを亡くしたあとの母の孤独を手紙で慰めることさえ忘れていた。

機会のないまま年月が経ち、再会したときに母は病床にあった。それも、迷惑を掛けたくないと言う母を病院の者が説得して尚子を呼び出したのだ。

あの笑顔は、母が見せたいと願い、子の方も見たいと思いつつかなうことのなかった幻だったのかもしれない。

亡くなって七年もしてから自分を手招きする母の顔に巡り会えた幸せを、尚子は心の壁に擦り込むように味わっていた。

二

鹿が鳴いた。

はっと目を上げ、回りを探るが、石段を挟んで山肌一面を覆う羊歯の茂みに動物の気配はない。

不動尊を祀る山頂までの二百段の参道を間にして、杉林が樹影を天空に突き立てている。木立は今、いつもの静寂を捨て去り、怒濤のような音をあげている。

「空耳か」と呟いて尚子が石段に視線を戻したとたん、頭上で再び声がした。

杉の太い幹をたどって空を仰ぐ。深緑のぼさぼさ頭が風に煽られ、円を描いて揺れている。

鹿の声と聞いたのは、その幹が軋む音だった。

弦を擦ったような一筋の音。それは風の唸りに混じり、遠のいては近づく。樹林の先端に僅かに覗く空を、白い雲が慌ただしくよぎった。

水溜まりのようにそこだけ開いた空の底から、風の声が響いて来る。

腹の底に聞かすようなこの轟きの上を、さらさらと葉の擦れ合う音が滑る。

猛り狂う木枯らしに包まれて大気へ舞い上がる感覚に抗いながら、尚子は階段をゆくりと登った。

時雨れてしっぼり濡れた御影石に、錆色の杉の枯れ枝や柵の茶色い葉が落ちている。

強い風に折れた楓や杉の、まだ緑を残した枝が目を惹く。そんな若い枝まで落ちているのは、毎日参拝を欠かさない尚子にも珍しい光景だった。

この不動尊参りは、尚子がまだ四つや五つのころからのものである。

「あんたは体が弱いさかい、すすく育ちますようにってお不動さんをお願いせんならん。こんだけきつい坂道を毎日登ったら体にもええやろ、一挙両得や。おきばりやす」

母はそう言っただけでも降らぬかぎり、夕方の買い物の前に尚子を連れてここへ来た。

そのせいか、毎年冬になると度々熱で臥せていたのがすっかり丈夫になり、いつのまにかこの不動参りも止めていた。

とは言っても母自身は続けていた様子で、尚子の大学受験を控えてお百度参りでもし

ていたのか、参道へと連なる坂道を登って行く母の後ろ姿を見かけたことがある。このところ寝坊続きの自分がようやく起きるころ、母がどこからか戻って来たのはそのためかと合点し、かえって親の期待を煩わしく思ったものだ。

尚子が再びこの山に登り出したのは、ちょうど一月前、母親が亡くなったあと七年間空家にしていた実家に戻ってからだ。

放っておいたのを売りに出そうと決意して来たものの、買い手のないままこうしてぐずぐずと居座ることになった。

夫と大学生の一人息子は東京に残っているが、それぞれ好き勝手に、むしろ自由を謳歌している様子だった。

尚子にとっては久々の独り住まいである。

朝目覚めると、目の前に差し出された一日の長さを思って途方に暮れる。家族の雑用に追われていたときにはこんな時間が欲しいと憧れたのに、いざ手に入ると戸惑った。

布団を首まで被ったまま時おり目を開け、すりガラスの窓がしだいに明るむ気配を確かめる。

一日こうして何をせずとも、差し支えないのだ。それどころか、このままこの世から消えても、ほんのひとにぎりの身内に波がたつだけで、あとはまた以前の流れに戻るだろう。

そんな尚子の取り留めのない日々の中で唯一、務めを果たしたと思えるのが、このお不動参りの山歩きだった。

それにしても、こんなに山が荒れるのも珍しい。

全ての音を呑み込む強風に、野鳥たちはどこへ逃げたのか。普段は参道を挟んだ樹林の遙か上の梢で、光の煌めきを音にしたような歌声をあげているのに。

そう思っ上を向いた尚子は、石段を上り詰めたあたりに人影を見た。悪天候のせいかここまで誰にも会わなかったので、体が先に緊張する。

それが一人の老婆と気付いたとき、再び尚子は母を呼んでいた。

昨日の踏切りのこともあるので他人の空似と知りつつも、声が先に出てしまった。それほどその老婆は亡くなった母に似ていた。

人は老いると、赤ん坊のころがそうであったように同じような顔付きになる。親を見送ってからこれまで、幾人の年寄りを母と見違えたであろう。

最初のころは激しく胸が揺すぶられ、早く幻を掻き消して寂しさから逃れようとしたものだったが、このころは母を垣間見た心の温もりを留め置きたいと思うようになった。その老婆は、足元のおぼつかない幼児のように段差を探りながら降りて来る。ひつめ髪が乱れ、額に幾本か白髪がかかっていた。

尚子の胸に、母親と二十年ぶりに病院で再会した時の驚きが甦る。その老け様はまるで玉手箱を開けた浦島太郎だった。

「この無表情で弱々しい人が、夢の中でさえ諍い撥ね付けた母親なのか」
老いの皺か痛み of 歪みかわからぬ面持ちの向こうで、何を考えているのか。もどかしい思いで表情を読み取るうとしても空しさがつるばかり。心を割って話をするどころではない。

しかし癌末期の痛みの合間にも、いつとき和むことがあるようで、ある夕方、ベッド脇の椅子で看病疲れのまどろみからふと目醒めると、夕陽の中で母が身を起こしてこちらを見つめていた。

何も口には出さなかったが、その眼差しは幼いころ見た母親のものだった。声をかけようとしても舌が張り付いて動かない。

許されたという感覚に目が潤んだ。

二人のもつれ合った感情の糸が解れて、慈しみ甘えていた親子の原点に戻っていた。

尚子の耳に再び風の唸りが戻った。

いつの間にもすれ違ったのか、老婆の姿がない。あわてて見下ろすと、石段の脇に屈みこんでいる。

杉木立の間にひっそりと下草に隠れるように立っている地蔵に手を合わせているのだ。襟元をすっぽり毛糸のショールで覆った羽織の背中が丸い。

「おおきに。おおきに。じきにそっちへまいりますよって、お迎えはもうしばらく待ってください。」

耳が遠いのか、こちらにも届くような声を上げながら、赤い前垂れを付けた地蔵に幾度も頭を下げている。

そう言えば、母も最後は何かと言つと手を合わせていた。

「こないに長生きさしてもろておおき」
と言つて頭を下げる老婆を、あの世で待っているのは誰であろう。
そんなことをつらつらと思ひ浮かべながら、尚子は石段の上まで登りきつた。
振り返ると、老婆は折り曲げた背をようやく伸ばすところであつた。

三

不動参りのあと、尚子は独り膳のための僅かな買物物をすませて家へ戻つた。
玄関の硝子戸を閉めると木枯らしの吹きすさぶ音が遮られ、耳を塞いだようにしんと
なつた。

火の気のない留守居は外よりも冷え冷えとして、土間のコンクリートから寒さが這い
のぼつてくるようだ。

冬至を超したとはいへ、まだまだ日は短い。薄闇の中で、母の履き古したつつかけが
土間の隅に置き去りにされている。

片付けられないままでいるそれから目を逸らし、尚子は上がり框に買物籠を置いた。
玄関の間の奥の襖が僅かに開いており、その後ろの暗がりには誰かが潜んでいる。そんな
妄想に急かされるように靴を脱ぐと、居間へ行って炬燵の上に下がっている電燈のスイ
ッチに手を伸ばした。

パチンと音がして、白い笠から円錐形に光が広がる。

雑然としてはいるものの、それなりに整頓された生活の場。

永年の一人暮らしで淘汰されて残つた日常の品々。

母の匂いの凝縮された空間が浮かび上がる。

全てが用意されたその空間へ、母の代わりに自分が入つただけのことだ。

炬燵の前に置いたテレビのスイッチを入れる。家に帰るとそのままテレビへと足が向
くのは、人の声が聞きたいからだ。独身のころの習慣が戻っていた。

炬燵の左手、座つたまま手が届く棚に住所録から電話帳、アルバム、それに化粧瓶ま
で所狭しと置いてある。

炬燵の上には一人分の食膳を乗せる隙間を残して、小さな置き鏡や箸箱に醤油さし、
広告のチラシを切つたメモに鉛筆立て、そしてティッシュペーパーの箱がそれぞれの場を
得て並んでいる。

席を立たずに一通りの用が足せるのだ。藤編みの小さな屑籠まで炬燵の横に置いてあった。

寝るときはこの四畳半から隣の六畳の間に移り、箆笥の横に折りたたんだ布団を広げればよい。母はそうやって、入院するまで誰の世話にもならず暮らしていた。

尚子は作り置きのおでんに冷や飯、買ってきた惣菜、それに臘昆布で簡単な吸い物を作ると、櫛の盆に乗せて炬燵の前に座った。テレビはちょうど六時のニュースが始まったところである。

凍てつく中を歩いたので腹は減っている。幾度も煮返して味の染みたこんにやくを口一杯に頬張ったまま、テレビの画面をぼんやりと眺める。

ふと横に目をやると、炬燵機の隅に置いた鏡が目に入った。

鏡の中から母がこちらを見つめている。

ぎょっとして目を見開くと、その顔は自分にすり変わった。それでも鏡の中に引き込まれるように、目を逸らすことができない。

噛むたびに顎が上下し、首まわりの筋が古木の根元のように浮き上がる。

そこにはまぎれもなく老いが現れていた。

目を背けようとした瞬間、思い出すものがあつた。記憶にある母の、物を食べている顔である。

生きるための行為を、生の終局に向かってひたすら繰り返している。母がそうしたように自分も。

人は己の首筋から目を背けるころになってやっと、生きるということがどういうものかわかってくる。

幾つもの試練の折々に、かつて自分の母親も経験したであろう哀しみを味わい、目の醒める思いに浸る。

離れてからの年月がともに暮らした年月を凌ぐようになって、ようやく母と子は近づくのだ。

母が先に逝った今は、言葉で言い尽くせない親の思いをすっかり自分が引き継いでいる。

そう思って鏡を眺めていると、首の窪みの老いの生々しさが、尚子にはなにか懐かしいものに見えて来るのだった。